

関東の親鸞

——三部經千部読誦の中止を通して——

一 楽 真

はじめに

「関東の親鸞」という大変大きなテーマを挙げさせていただきましたが、申し上げたいことは、私自身はフィールドワークなどは全然できていませんし、当時の関東の実情等、いろいろ伝承されておることについても詳しくありません。しかし、関東での約二十年間にわたる親鸞聖人の生活が、親鸞聖人の後の教学の営みに大変大きな意味をもっているということを思いますので、その関東時代がどのようなものであったかを、今日はご一緒に尋ねさせていただきますと思います。

お手元に簡単な資料をお届けさせていただきました。それを見ていただきながら話を進めたいと思います。関東時代と一口に申ししましても、大きくは流罪が許されてから京都に帰られるまでと見ることができます。ただ、勅免のあとすぐに関東に行ったということは考えにくいです。だいたい親鸞の年齢で言えば、四十二歳ごろと考えられています。また帰洛についても、何年かは確定できませんが、だいたい六十三歳頃であろうと推測されています。その約二

十年余り、それを関東時代というふうに今日は呼びたいと思います。その中でということが伝えられているかと言いますと、親鸞聖人自身の記述では大きく二つです。

一つ目は五十二歳、年齢はすべて数え年で申し上げます。『教行信証』の中に書かれてあることですが、「我が元仁元年」が末法に入って六百八十三年であると「化身土巻」に書き記されています。この五十二歳のとき、これは間違いないく関東におられたわけです。今日は、後で今井先生からお話をお聞きできることを大変喜んでおるのですが、『教行信証』の執筆について詳しくうかがえればと思っております。それからもう一つ、五十八歳の時のものとして、聖覚法印の『唯信鈔』を书写したものが伝えられております。もちろん『唯信鈔』は何度も書写されていますが、五十八歳の書写は確実に関東時代であつたと推測されます。現在、高田派の専修寺に所蔵されている親鸞自筆の『唯信鈔』が、関東時代に書かれたものであるということであります。

ただこれだけでは、関東でどういうことをなさっていたのかを詳しく窺い知ることはできません。それで、恵信尼さまが伝えるものとして、『恵信尼消息』に次の二つのことが窺えます。後で少し詳しく申し上げますが、全部で十通というふうに数えるときの第五通目、ここに三部経千部読誦の問題が伝えられております。これは今日、一番中心にお話し申し上げたいことです。

それからもう一つは、第三通に伝えられることで、常陸国の下妻、坂井の郷で、恵信尼が夢を見たという出来事が伝えられております。これはどちらも関東時代の宗祖、親鸞のお姿をありありと伝えるものであります。特に三部経千部読誦については、きちっと年号が記されておりまして、関東時代の明確な事跡としてこれは確かであると見ることができます。

また、その他の伝記が伝えるものとしまして、ここに覚如上人が書かれたものを幾つか挙げておきました。一つには『親鸞伝絵』が伝える稲田での興法。稲田の草庵でのことです。それから山伏済度。これは山伏弁円を済度した

という物語。これらが『御伝鈔』に伝えられます。『口伝鈔』には、一切経校合の事業に参加したということが伝えられています。これは何年の出来事であるかを特定するのが難しいのですが、この中に出てきます「開寿殿」、これは北条時頼を指すと思われるのですが、「開寿殿」が九歳であると言われていたもので、親鸞は六十三歳の時だと確認できます。もう一つは『拾遺古徳伝』。これは覚如による法然上人の伝記ですが、親鸞は法然上人が亡くなられたということを知り、このまま京都に帰っても仕方がないということで、関東に出て行かれるということを知り、それが第九卷の第七段に出てきます。他にも、高田の『正明伝』等もありますが、だいたい後年に作られたものと指摘されている通りで、一々挙げることはしません。それで今日は、きちつと年号が記されている三部経千部読誦を中心にお話をしたいと思っています。

一 『恵信尼消息』の課題

まず、『恵信尼消息』について確かめておきたいと思っています。『真宗聖典』でも「恵信尼消息」となっていますが、「恵信尼文書」あるいは「恵信尼の書状」とも呼ばれます。もし「消息」ということが個人的な手紙だという響きをもつとしますと、消息という言い方は決して十分とは言えないと思います。ただ、『真宗聖典』にならつて、私も「恵信尼消息」と書かせていただきました。内容を簡単に見ますと、下人の讓状が二通初めに載っています。これらは親鸞の在世中で、建長年間の年号が入っています。続いて書状が八通、これらは初めの二通とあわせて娘の覚信尼に宛てたものであります。離れて暮らしている越後から京都にいる覚信尼に宛てて書かれたものであります。それから末尾に『無量寿経』の音読仮名書きの文が三葉半載せられています。これについては、手紙類との関係がよくわからないということで、『真宗聖典』には載せていません。「恵信尼の文書」というふうに考えるならば、これも併せて収録すべきであろうと個人的には思います。ちなみに西本願寺の『浄土真宗聖典』では、下人の讓状は書状の枠から

外れると考えて、書状八通のみを収録しています。この辺は『聖典』というものをどう考えるか、その編集方針にも関わる問題だと思っています。

書かれた年代は建長八年から文永五年のもので、恵信尼の年齢では七五歳から八七歳までということになります。現在は卷子になっていますが、もともとの紙はバラバラであったようです。大正十年に西本願寺において発見された後に、卷子本に装丁を整えられたわけです。現在も西本願寺に所蔵されています。「恵信尼の消息」というふうに呼びますと、母親から娘に宛てた手紙というイメージをどうしてももってしまいがちですが、個人的な手紙として括れないものが今日取り上げる第三通から第五通目の手紙であります。

第三通目から第五通目は、親鸞の死を知らせる手紙が覚信尼から恵信尼に届くわけです。残念ながら覚信尼の手紙は現存しておりませんが、その返事の手紙、返書です。後の方にある、第七通、第八通、第九通、第十通などを見ますと、お母さんから娘への私信的な要素を垣間見ることができます。たとえば針を送ってくださいとか、飢饉で困っておりますとか。自分はもう長くはない、もう極楽に参るから、あなた方もともに極楽に参り合わせてくださいというような母から娘への語りかけが出てきています。ただ、この第三通から第五通というのは、明らかにそういう手紙とは趣を異にしています。

第三通目の冒頭を見てみましょう。

昨年の十二月一日の御文、同二十日あまりに、たしかに見候いぬ。何よりも、殿の御往生、中々、はじめて申すにおよばず候う。

（『聖典』六一六頁）

こういう書き出しです。「昨年の十二月一日の御文」というのが、十一月二十八日に親鸞が亡くなったわけですが、そのことを伝える手紙です。十二月一日付で覚信尼は母恵信尼に宛てて書いたわけですね。それから「同二十日あまり」ですから、約二十日ばかり経って、母の元に届いたわけです。それをたしかに見ましたという書き出しです。

覚信尼は晩年の親鸞の身の回りの世話をしておりましたし、たぶん葬儀等のいろいろな差配もしたでありましょう。ところが、そのことをねぎらう言葉は一切出てきません。いきなり「何よりも、殿の御往生、中々、はじめて申すにおよばず候う」と書かれるわけです。ここで「殿」というのは親鸞を指しております。親鸞が往生を遂げたということについては、いまさらあらためて言うまでもありません、という大変強い口調がここには窺えます。逆に言いますと、覚信尼から届いた手紙には、親鸞聖人は果たして往生を遂げたのでありましょうかという疑い、往生についての疑いが書かれていたと推測されるわけです。

同じ第三通の後の方には、

されば、御臨終はいかにもわたらせ給え、疑い思いまいらせぬうえ

（『聖典』六一七頁）

という言葉も見えます。御臨終の様子がどのようなものであったとしても往生については疑いありません、ということを書き付けているわけです。また、おしまいのところから窺えるのですが、覚信尼からすれば兄に当たる益方と兄妹で親鸞の臨終に遇うことができたわけです。恵信尼はそのことを喜ぶと同時に、次のように言います。

益方殿にも、この文を、同じ心に、御伝え候え。

（『聖典』六一九頁）

言わば親鸞の臨終がどのような形であったとしても、親鸞が往生を遂げたことは間違いないと恵信尼は確信しているわけです。それを覚信尼にぜひとも伝えておきたい、さらには益方にも伝えておきたいという課題をもっているのです。それが、この第三通から第五通というところなのです。ですから、単に母から娘への手紙というものではなくて、この際にぜひとも伝えておかなければならないことがあるということでもあります。この意味では、親鸞の臨終および往生についての疑いは、覚信尼の個人的なものではなく、覚信尼の周りにいる人も含めての疑いだったと推測されます。

二 恵信尼が伝えたかったこと

今、全部を詳しく見ていくことはできませんが、第三通には大きく二つのエピソードが載せられています。親鸞の死の知らせを受けまして、往生は間違いないということを述べる理由になっています。その一つ目が、山を出た親鸞が六角堂の参籠を経て法然上人と出遇い、「ただ念仏」の教えに帰した。そこにはたとえ惡道に堕ちても構わないというほどにまで徹底した親鸞の信心を窺うことができます。もう一つは、常陸国下妻の坂井の郷で、恵信尼が夢を見たという話です。その夢は、堂供養か何かをしている中で、法然上人が勢至菩薩であつたと教えられる、あわせて善信房、親鸞が観音菩薩であつたと知らされる夢でした。恵信尼はその夢を親鸞に伝えました。ただ、親鸞が観音菩薩であつたという方は言わなかったのですが、法然上人が勢至菩薩だという夢を伝えたところ、それは「実夢」であるということを経験が言ったわけです。それ以降、恵信尼は、言わなかったけれども親鸞が観音であるということも、これは実夢であるはずと思つてきたと言うのです。言わば、私に仏法を教えてくださいと仰いだこと、うことですね。人として現れているけれども、観音菩薩であると。もつと言うならば、どんな者も平等に救つていく観音菩薩として親鸞のことを仰いだというエピソードなのです。このことをぜひとも覚信尼と益方に伝えておきたいのです。だから臨終の有様にとらわれてはならないということを覚信尼と益方に言い残しているのです。続く第四通には二月十日という日付が書かれておりまして、ここまで一連の手紙だということがわかります。第四通の中身については今日は触れませんが、十二月二十日すぎに読んでから、大変長い手紙が返信として書かれた。これが第三通・第四通であります。

その次に、紙が変わりまして、書かれているのが第五通です。第五通はいわば紙が重なるように折られた形で書き出されています。ところが、重ねた表だけでは書ききれなくなつたと見えまして、今度は重ねた紙の裏側に逆向きか

ら書いてあるんですね。ちょっと口で説明するのは難しいですが、二つ折りを開けば、上からと下からと書かれているのです。紙が足りていれば重ねたままで良かったのですが、書き足りなくなつて裏側にまで書いている。これが第五通の書きようであります。ここからは推測ですが、第四通まで書いたところで一応は終わったんですけれども、さらに、やはり加えてこれだけは言うておかねばならないという思いがあったのではないのでしょうか。それが紙の扱い具合から見えるわけであります。

この手紙以外にも、書き始めは冒頭部分の紙を少し空けて書き出しているのですが、最後まで紙を使つても足りなくなつて、また冒頭に戻つて返し書きをしているものが結構見られます。そうすると、恵信尼の越後時代というのが偲ばれまして、決して紙が十分にあったといえなかつたと思われるます。それは、第七通以降などにも、飢饉が続いているとか、本当に食べるものがないとか、着る物にも困っているということが見えます。第五通を書く時もそうだったとは断定できませんが、少なくとも重ね折りした紙を開いて、一枚の紙に上からと下から書かれているという状況です。やはりこのことを何としても娘や息子たちに伝えておかねばならないという恵信尼さまの強い思いが手紙の状況からも偲ばれることあります。

この第五通目の最後に、第三通目と同じ二月十日という日付が記されています。つまり一連の手紙なのです。それで、「第三通から第五通は親鸞の死を知らせた覚信尼への返事」とまとめました。親鸞の臨終の有様をめぐって、親鸞の往生に対する疑いが起こつていたということが推測されます。ただそれは決して覚信尼の個人的な疑問ではなかつたということが思われます。もしも、娘からだけの疑問なら娘を諭すような書き方でもいいと思います。ところが、周りの人にも見せてほしいと、直接には「益方殿」の名前しか出ませんけれども、周りの人にも見せてほしいというところには、覚信尼を取り囲む周りに起こつていた疑問と考えられます。親鸞という人は本当に往生を遂げたのだろうか。推測を加えて言えば、本当に立派な仏教者だったと言えるのだろうか。こういう疑念が湧き起こつていたと

いうことが思われます。

そのことを既に指摘して下さっている論文があります。大谷大学の『大学院研究紀要』第二十一号に所収されています。広田万里子さんの論文です。私は広田さんの論文の全編に同意をするというものではありませんけれども、しかし、この「覚信尼個人の疑念ではなかった」という、ここには大いに賛意を表したいと思います。ですから、この他の『恵信尼消息』に収められる消息類と違いまして、この第三通から第五通というのは特定の課題を持っている。そういう文として見る事ができると思います。これが一連の二月十日という日付を持った手紙でございます。それで今日は、特にこの第五通目の三部経千部読誦というエピソードですね。このことから何が窺えるかということに絞ってお話を申し上げたいと思います。

三 三部経千部読誦

「三部経千部読誦」と書きました。この手紙は少し長いのですけれども、一応言葉に当たっておきたいと思っています。三部経の読誦は「衆生利益のため」に始めたことがわかりますが、どんなことがあったのかということについて、まず手紙を読んでからにしましょう。

善信の御房、寛喜三年四月十四日午の時ばかりより、風邪心地すこしおぼえて、その夕さりより臥して、大事におわしますに、腰・膝をも打たせず、天性、看病人をも寄せず、ただ音もせずして臥しておわしませば、御身をさぐれば、あたたかなる事火のごとし。頭のうたせ給う事もなのめならず。さて、臥して四日と申すあか月、苦しきに、「今はさてあらん」

（『聖典』六一九頁）

原文では「まはさてあらん」と仮名で書いてありますが、『聖典』は「今はさてあらん」と翻刻しています。

「今はさてあらん」と仰せらるれば、「何事ぞ、たわごととかや申す事か」と申せば、「たわごとにてもなし。臥

して二日と申す日より、『大經』を読む事、ひまもなし。たまたま目をふさげば、經の文字の一字も残らず、きららかに、つぶさに見ゆる也。さて、これこそ心得ぬ事なれ。念仏の信心より外には、何事か心にかかるべきと思ひて、よくよく案じてみれば、この十七八年がそのかみ、げにげにしく『三部經』を千部讀みて、衆生利益のためにとて、讀みはじめてありしを、これは何事ぞ、自信教人信、難中転更難とて、身ずから信じ、人をおしえて信ぜしむる事、まことの仏恩を報いたてまつるものと信じながら、名号の他には、何事の不足にて、必ず經を讀まんとするやと、思いかえして、讀まざりしことの、さればなお少し残るところのありけるや。人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべしと思ひなして後は、經讀むことは止りぬ。さて、臥して四日と申すあか月、今はさてあらんとは申す也」と仰せられて、やがて汗垂りて、よくならせ給いて候いし也。

『三部經』、げにげにしく、千部讀まんと候いし事は、信蓮房の四年、武藏の国やらん、上野の国やらん、佐貫と申す所にて、讀みはじめて、四五日ばかりありて、思いかえして、讀ませ給わで、常陸へはおわしまして候いしなり。信蓮房は未^{ひつじ}の年三月三日の昼、生まれて候いしかば、今年は五十三やらんとぞおぼえ候う。

弘長三年二月十日

惠信

『聖典』六一九頁

こういう手紙であります。始めのほうを見ていただいたらおわかりかと思いますが、寛喜三年というのは親鸞五十九歳の時のことであります。その時に風邪の心地がして、夕方から寝ていたということです。「腰・膝をも打たせず、天性、看病人をも寄せず」とあります。決して看病の人を回りに寄せなかつたと書いてあります。それほどきつかったのです。「ただ音もせずして臥しておわしませば、御身をさぐれば、あたたかなる事火のごとし」、大変高い熱が出ていたことがわかります。それから「頭のうたせ給う事もなめのめならず」、「なのめならず」というのは尋常ではないということです。痛くて痛くてたまらないという状況ですね。それから「さて、臥して四日と申すあか月、苦しきに、今はさてあらん」とおっしゃったと。こういうことです。

「まはさてあらん」。これをどのように読むのかについては、いろいろと意見がわかれるところです。岩波の『古典文学大系』の脚注では「まはさてあらん」とは、「今はしかしてあらん」の形を変えたものだと言っています。だから、「今はそうしておこう」というふうにならば多屋先生は訳しておられます。他の先生方でも「今はそうであらう」と。その「あらん」を推量と読むか意志と読むかで意見が分かれますけれども、大体が「今はそうしておこう」、あるいは「今はそうであらう」という訳になっています。そういう先人の解釈を今は受けて読んでおきたいと思います。そうおっしゃった所、恵信尼が「何事ぞ、たわごととかや申す事か」と言ったわけです。何かたわごとをおっしゃったのですかと尋ねた。すると親鸞聖人は「たわごとではない」と。「臥して二日と申す日より、『大経』を読む事、ひまもなし」と。寝てからずっと『大経』の文字が出てくるというわけです。そしてたまたま目を塞げば「経の文字の一字も残らず、きららかに、つぶさに見ゆる也」と言われるように、はつきりと細かく見えたわけです。「さて、これこそ心得ぬ事なれ」と。これはどうしたわけかとおっしゃった。「念仏の信心より外には、何事か心にかかるべき」と思っていて、よくよく案じてみれば、この十七八年がそのかみ」。これは正確には十七年前であります。信蓮房が四つの歳というのが後で書かれているように、親鸞が四十二歳の時に「げにげにしく『三部経』を千部読みて、衆生利益のためにとて、読みはじめてありし」とこうあります。「げにげにしく」とは「もつともらしく」ということです。ね。つまり、この時に親鸞は、「僧に非ず、俗に非ず」という形で「愚禿釈親鸞」と名告っておられますが、残されている御絵像などから見れば、僧侶の姿・形を全部捨て去ってしまったとは言えません。周りの人から見れば僧侶の形であったわけです。仏教者として、あるいは僧侶として、どうかしてほしいという依頼があったと思われる。それを受ける形で、もつともらしく三部経を千部、衆生利益のために読み始めたということです。

ところが「これは何事ぞ」といって「自信教人信、難中転更難」。これは後で詳しくお話しますが、「自ら信じ人を教えて信ぜしむ、難きが中に転た更難し」と。これは善導大師の言葉が元でありますが、このことを知っているはず

なのに、なぜこういうことをするのかというふうに自分で反省したのです。「身ずから信じ、人をおしえて信ぜしむる事」、それが「まことの仏恩を報いたてまつるものと信じながら、名号の他には、何事の不足にて、必ず経を読まんとするやと、思いかえして」、読むことをやめたのです。ところがそれから十七年も経って、またその時の思いが出てきた。熱にうなされる中でお経の文字が出てきたのです。それを「さればなおも少し残るところのありけるや」と言われています。つまり、衆生利益を思い立って、三部経を千回読むことを始めたのですが、それを止めたという出来事なのです。読み始めたのですが、四、五日して思い返して読まなかったということです。

後の部分では「三部経げにげにしく、千部読まんと候いし事は、信蓮房の四の年、武蔵の国やらん、上野の国やらん、佐貫と申す所にて」と言われていますが、この佐貫というのは、現在の群馬県の邑楽郡の佐貫であろうと推定されています。群馬県と埼玉県、あるいは栃木県との境のようなところであります。そして常陸、これは現在の茨城県ですが、常陸へ移っていったのです。ここに明確に信蓮房が四つの年と書いてありますので、一二一四年の親鸞四十二歳の時であるということがわかるわけです。問題は、当時どんな状況があったか、なぜこういう衆生利益ということとを親鸞が思い立ったかということ。また、思い立ったのに、どうして四、五日で止めたのかということです。

四 中止の理由

資料には、大阪大学の平雅行先生が真宗大谷派の教学学会で講演なさった、その講演録のものを挙げておきました。平雅行「若き日の親鸞」(『真宗教学研究』第二十六号所収)であります。詳しくはそちらに譲りたいと思いますが、建保二年という年は大変な天候不順が続いていたということが指摘をされています。鎌倉の鶴岡八幡宮で雨乞いが行われたという事例を挙げてくださっています。大変な天候不順が続く中で、庶民には食べ物がない。食べ物がないればおのずと病気も流行りますし、餓死者も出るわけであります。そのときに周りから、お坊さんなんとかしてくれ

ないかと要請されたのではないか。これは推測ですけれども十分ありえますね。その時と同じような状況が、親鸞五十九歳の寛喜三年にもあったのです。前年の寛喜二年から三年にかけて、「寛喜の大飢饉」といわれる、ものすごい飢饉であったそうです。夏に雪が降るとか、あるいは貴族が自分の庭を畑に改めるとか、本当に食べるものが日本中どこにもないというような状況が呈されていたことが指摘されています。ですから飢饉で苦しむ民衆に直面している親鸞。それが四十二歳のとき、さらには五十九歳のときだったのです。ですから、たまたま十七年後に風邪をひいて、『大経』が出てきたというのではなく、目の前には飢饉で苦しむ民衆がいた。これが建保二年と寛喜三年という時の状況だということを平先生は指摘くださっています。

おそらく周りからの要請で始めたのが三部経千部説誦であった。これはその通りだと思います。ただ、親鸞はそれを止めていくわけです。これがどういう理由からなのか、ここが大きな疑問なのです。平先生は思想の病であった。思想で悩んでいたと、聖道の慈悲と浄土の慈悲という、ある意味で教義的なところで話を展開されます。しかし果たしてそうか、ということが私は引っ掛かっています。反対に言えば、平先生から問題を提起していただいたので、親鸞が三部経を千回読むのをどうして止めたのかが私の中で大きな問いになったわけです。

ただ念仏一つに帰した親鸞。これは二十九歳の時のことです。ただ念仏以外は本当ではないと言うのであれば、そもそも三部経説誦などすべきではなかったでしょう。ところがなぜそれに踏み切ったのか。断るに断れなかったのだろうという推測はできます。けれども、一旦引き受けたものをどうして止めたのか。これは中々説明がつかないのではないのでしょうか。ましてや衆生利益などどうでもいいという問題ではありません。衆生利益は仏教において大きな課題です。私はここに衆生利益に対する見方の大きな転換があったに違いないと思います。

私の意見を申し上げる前に、覚如上人が『口伝鈔』の中で書いていることを紹介しておきたいと思います。『口伝鈔』というのは、法然上人の教えを親鸞聖人、そして如信上人が受け継ぎ、そして覚如自身も伝えられたという自ら

の立場を明確にしていこうとする書物です。そこには、本願寺を中心として門弟たちの心を一つに束ねていこうという覚如上人のご苦勞もうかがえますが、同時に覚如上人の意図が大きく反映されていることも否めません。この三部經千部読誦についても、『惠信尼消息』の内容を踏まえて書いていることは間違いないのですが、『惠信尼消息』とは伝え方が違ってると私には感じられます。たとえば、『惠信尼消息』では衆生利益するために読み始めたと書いてありますが、覚如の『口伝鈔』のほうでは、こう書いてありますね。

われこの三箇年のあいだ、浄土の三部經をよむ事、おこたらず、おなじくは、千部よまばやとおもいて、これを
はじむるところに
〔聖典〕六六三頁

とあります。ここに何歳からとは明確に出てこないのですが、この三年間、浄土三部經を読もうと怠らずに行ってきた。それで千部読もうと思いついたというのです。その後に「またおもうよう」とありまして、

「自信教人信 難中転更難」とみえたれば、みずからも信じ、ひとをおしえても信ぜしむるほかは、なにのつと
めかあらんに
〔同右〕

と言つて、

この三部經の部数をつむこと、われながらこころえられずと、おもいなりて
〔同右〕

こういうふうに書いています。この「部数をつむ」ということ。要するに、三部の部数を積み上げて、いわば善根功德を重ねるかのようなものであることを反省して読誦を止めていったという話になっております。ですから最後に、
わたくしにいわく、つらつらこの事を案ずるに、ひとの夢想のつげのごとく、観音の垂迹として、一向専念の一
義を御弘通あること掲^{けちえん}焉なり
〔同右〕

とまとめています。要するに、一向専念の一義を弘められていく、そういう出来事としてこの三部經の千部読誦とそ
の中止を見ているのです。この一節には「助業をなおかたわらにします事」というタイトルが付けられています

が、「三部経千部読誦」という助業をかたわらにした出来事と見ているわけです。そして、これ以降、いよいよ「一向専念」に立ったという見方であります。こういう見方を取る人は、現代の研究者の中にもかなりいるのではないのでしょうか。

古い話で恐縮ですが、かなり以前の大谷大学の宗教シンポジウムに、山折哲雄という宗教学者が来ました。話の題名は忘れましたが、山折さんは、親鸞の人生を三つに区分していました。まず比叡山時代をただ自力の時代、次に念仏に帰してから三部経千部読誦を止めるまでを半自力・半他力の時代、そして三部経千部読誦を捨てた後を純粹他力、ただ他力の時代と、三つに分けられました。私は当時、大学院生でしたが、疑問に思っていました。二十九歳で法然上人の教えに帰したということはどうなるのか、半自力ということが果たしてあるのか、ということに大へん引っ掛かったことを覚えております。

また、いわゆる「三願転入」について、親鸞の信仰の道程を段階的に見る人もありますね。第十九願から第二十願、そして第二十願から第十八願と、これを親鸞の時期に当てはめて考えようとする人もかなりあります。だから、二つをあわせると、比叡山時代は第十九願の時代。それから念仏に帰したけれども、五十九歳まではまだ自力が残っているから第二十願の時代。そして五十九歳以降が純粹他力の第十八願の時代だと見られるわけです。でもそんなふうに見るに分けられるのかということが、そのときから大きな疑問となつて残つてきたわけです。三願転入の文もどう見るかということは、よほど考えてみないといけませんね。何歳のときにここに入つたとは、親鸞はどこにも書いていません。「今」「まことに」と書いてありますが、あの「今」は、いつでも願海に転入する現在の一念を指していると思います。願海に帰入しながらも自力に揺らいでいくことが起こるというのが、実際の歩みではないかと思っています。ですから、五十九歳以降に完全な他力に入つたという考え方自体に問題があると思います。

ところが覚如上人の書きぶりは、そういう解釈を許すようになっていそうですね。やはりこれ以降、いよいよ一向

専念の一義を広められていったという書き方があります。しかし、これだとなぜ三部経千部読誦を始めたかはわかりません。また、止めたのは、教義的に正しくなかったからと読めるわけがあります。助業をやめていよいよ念仏一つに決まったという言い方なのですが、果たしてそうなのかということですが、

五 ともに念仏する者として

それで私の意見ですが、資料に「ともに念仏する者として」と書きました。要するに、周りの状況の中で三部経千部読誦を思い立った。衆生利益ということをお願いしたのになぜ止めたのか。それは単に教義的に正しくないという話ではないと思います。ましてや先ほども言いましたが、衆生利益などどうでもいいんだという話ではありません。ここには自分の「ただ念仏」に帰したときの、わが身に対する認識が少し揺らいだということがあったのではないかと言いたいです。どういふことかという、二十九歳で法然上人に出遇ったときは、『歎異抄』が伝えるとおり、

ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし

（『聖典』六二七頁）

という言葉によって、わが身を教えられたわけですが。あなたは弥陀にたすけられないといけない人間だということがはっきりした。逆に言えば、自分で自分のことをたすけられると思っている間は、弥陀も必要と思わないし、念仏もいらなわけです。阿弥陀仏にたすけられなければならない人間であるということを引きと教えられたのが、法然上人との出遇いだっただけです。ところが、それがここにきて周りからの要請とはいえ、經典を読誦して、衆生を利益しようとしたのです。その時に自分はたすける側に立ったわけでありました。たとえ一瞬といえども。これが四十二歳のときに親鸞が最も反省をしたことではなかったかと思えます。教義的に正しいか正しくないかという話ではなくて、自分をどう見るかという人間観がぶれたことに対する反省であります。だから、凡夫として阿弥陀によってたすけられなければならないということが二十九歳の時に決まったはずなのに、それが經典読誦によって、誰かをたすけ

てやれるように思った。これを反省して千部読誦を止めたのです。

それがどういう言葉にうかがえるかと言うと、まずは『恵信尼消息』が伝える親鸞聖人の五十九歳の時の言葉です。念仏の信心より外には、何事か心にかかるべき

〔聖典〕六一九頁

あるいは、

身^みずから信じ、人をおしえて信ぜしむる事、まことの仏恩を報いたてまつるものと信じながら、名号の他には、何事の不足にて、必ず経を読まんとするや

（同右）

こういう言葉であります。「身^みずから信じ、人をおしえて信ぜしむる」という言葉は、本願によつてたすけられていくことを自らも信じ、そのことを人にお伝えしていく、教えていく、それが仏恩に報いることであると確認しています。飢饉という現実を抱えて、人間が真にたすかつていく道を求めて悩んだ中から、阿弥陀の本願によるほかないということを見定めた言葉だと思えます。決して衆生利益をあきらめたわけではなく、ましてや衆生利益を投げ出したわけでもありません。実は衆生利益は如来の仕事であるということがはっきりしたことであります。だから、実際には、私がたすけてやるということは言わないわけですから、ともにおろろするよりほかなかったかもしれない。寄り添う以外に何もできなかったかもしれません。しかし、その中でもともに如来の教えをいただいているという、ここに立った。こういうことが三部経千部読誦の中止ということの意味だと考えています。

それを「衆生利益は如来の仕事、如来の本願にたすけられていくのは衆生の責任」と書きました。「自信教人信、難中転更難」という言葉が伝えたとおり、如来の本願にたすけられていくことが我々の責任であります。たすけるのが如来の仕事だからといって、すべてを任せてほったらかしという意味ではありません。如来の本願に領くこと、本願が人間の愚かさを見抜いているその心をいただくこと、これは不可欠であります。だから『歎異抄』の言葉を挙げるまでもないかもしれませんが、阿弥陀の本願は攝取不捨だからといって何でもありだというわけではないわ

けですね。第一章で言いますと、「弥陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず」と書いてありますが、その後には「ただ信心を要とすとしるべし」と明確に書かれています。その本願の心に領くことは不可欠であります。本願など要らないと言ってる人間が、本願によってたすけられることは有り得ないわけであります。

親鸞は本願を船に譬えてくれますが、本願の船に乗りたくないと言っている人間が、知らないうちに本願の船に乗って浄土に往っていた。こんなことは有り得ません。どこまでも本願の船に乗りたくないという決断は、衆生一人ひとりの上に不可欠であります。ただ、だからと言って、あの人をその気にさせてやろうとか、この人に信心を与えてやろうとか、この人を念仏者にしてやろうというのは、これは如来の仕事を盗むことです。ともどもに如来の本願をいただいていく。ここに立っていったのが親鸞聖人であったということを、押さえておきたいのです。

ところが、この出来事から十七年の後、寛喜二年からの冷害による飢饉を前にした時、親鸞は風邪の熱で臥せった。その床の中で再び經を讀誦しようとする心が起こってきたわけであります。それを親鸞はここで、「人の執心、自力の心」というふうに言っています。一度、四十二歳の時に思い切ったはずのことですね。私がたすけるのではない、ともどもに如来の本願によつて、人々とともにたすけられていくということが明らかになつたはずでした。ところが大飢饉で次々に人が亡くなっていくのを目にした時に、なんとかできないものかという思いがまた沸いてきたわけです。だから、ここでいう「人の執心、自力の心」とは、なんとかたすけてやりたいという心として押さえることができるのではないかと思います。しかし、それもまた、私はたすける側の人間ではなくて、ともどもにたすけられる側の人間、たすけられていかなければならない人間だということを確かめていった。それがこのときの出来事ではないかと思ひます。

少し補足になりますけれども、私は「人の執心」と「自力の心」という言葉を同じ意味でとりたいと思います。自力という、すぐに自分の力というふうに受け取る人が多いんですが、『一念多念文意』では、

自力というのは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからを上げみ、わがさまさまの善根をたのみとなり
〔聖典〕五四一頁

と書いてあります。「たのみ」、あてにする心であります。私は身体に自信があるとか、私は真面目だとか、私には力があるとか、これだけの業績を果たしてきたとか。それをあてにする心が自力と言われています。ですから、「執われる心＝自力」というふうに、ここではとっておきたいと思います。ですから、『恵信尼消息』は「人の執心、自力の心」ということで、私ならなんとかできる。私がたすけてやる。もつと言えば、私がたすけてやらなければならぬということ。「執心」「自力の心」という言葉でおさえていると思います。それを「よくよく思慮あるべし」と言ったところに、初めて経を読むことがとどまったのです。これは、自力の心が無くなったという話ではありません。自力の心の深さを思い知ったのです。四十二歳のときに思い切ったはずの、人をたすけてやるうという思いが、五十九歳になってまた出てきた。これがいかに深いかということを見ただけであります。ですから、念仏することによって、その執われの心、執心がなくなるのではありません。かえつていよいよ凡夫である。もつと言えば執われを離れることができない私であることが明確になったということが、親鸞五十九歳の時の反省であつたと思います。

先ほど紹介しましたが、五十九歳以降、もう二度と助業に走らなくなったとか、ここからいよいよ純粹他力に入つたという考え方に、私はとても同意することはできません。自力を離れられないわが身が明らかになつた。執われの心を離れられない自分が明確になつた。これが五十九歳のときの出来事であると受け止めたのです。念仏を称えて執われなくなるではありません。離れられない身であるからこそその念仏であります。たとえて言えば、念仏によって、人をねたまない、憎まない、腹も立てない、傷つけることもなくなれるのでしたら、その日からもう念仏は要りません。そうではなくて、傷つけることを離れられない私が明確になつたわけです。すぐに自分がたすける側になる。そういう自分だからこそ、いよいよ本願を仰ぎ、阿弥陀を念ずるところに生きる道が知らされる

のです。

六 信心のたじろぎ

『恵信尼消息』に戻りますと、恵信尼が伝えたかったことも、ここにあるのではないかと思っております。先ほど申し上げましたが、第三通は、親鸞の往生は間違いないということを語るもので、六角堂を経て法然上人に出遇った事実と、もう一つは堂供養の中で法然を勢至菩薩、それから親鸞を観音菩薩と仰いだという夢を見たということをもつて伝えようとしていました。だから、親鸞の臨終がどのようであつても、親鸞の往生を疑うことはありませんと恵信尼が語っている手紙でしたね。ところが、ここで恵信尼は考えたのではないかと思ひます。なぜ往生を疑うのか。なぜ親鸞の臨終の有様によつて往生してないのではないかという疑念が出てくるのかと。そこには念仏した者は立派になるはずだという前提が覚信尼をはじめ、あるいは周りの人にもあつたのではないかということです。もう執われの心も起さないし、自力の心もよおさない。念仏すればそういう立派な者になれるはずだという思いが、周りの人に動いていたのではないかということです。しかし、そうではないぞということを伝えたい。これが第五通を、紙を新たにして、どうしても言っておかないといけなかつた一点ではないかと私は思ひます。つまり、念仏を称えることによって、だんだん立派な者になっていくという話ではないわけです。危ういからこそ、念仏を称え続けなければならない。すぐに自分の執われの心にふりまわされるからこそ、本願に導かれて生きていかないといけない。これが、四十二歳の親鸞、さらには五十九歳の親鸞が確かめたことであつたのです。だから、恵信尼の言葉は次のように聞かれます。あなた方は念仏すれば迷わないような人間になれると思つてゐるではありませんかと。

考えてみれば、奇瑞を期待するのも、まさにそういう心からです。亡くなつたときに、紫の雲がたなびくとか、妙な香りが漂うとか、法然上人の亡くなつた時のような相が、親鸞にも現われるはずだと考える。この奇瑞を期待す

ること自体が、親鸞を高みに上げていこうとする心からくるわけでしょう。さらには、念仏する者は「賢善精進の相」、そういう姿にだんだんなっていくのではないか。つまりは自らも賢くて立派な者になれるのではないかというイメージであります。実際に、少し年代は後になりますが、『歎異抄』を読んでみれば、後半の八カ条というのは、基本的に念仏者がおかしている誤りですね。私は親鸞の教えを聞いたという人が、自分は立派だということを立場にして、そうでない人を批判していくという問題が散見されるわけです。つまり念仏すればこうなれるはずだと思い、何か念仏者の雛形というか、典型を予測しているところに大きな問題があるのです。しかし、少なくとも親鸞にとつて念仏とはそういうものではありません。いよいよわが身の愚かさを知らされ、愚かであるからこそ、念仏もうして、仏に導かれながら歩んでいったのです。

親鸞が生きているときに、関東に自分の代わりに送った慈信房善鸞が、かえって関東の人達の混乱に拍車をかける事件が起こります。それを伝える親鸞の手紙が残されています。その事件を受けて、関東の門弟に宛てた手紙にこういう言葉があります。

慈信房がもうすことによりて、ひとびとの日ごろの信のたじろきおうておわしましそうろうも、詮ずるところは、ひとびとの信心のまことならぬことのあらわれてそうろう。よきことにてそうろう

（『聖典』五七七頁）

慈信房というのは善鸞のことです。善鸞が言ったことによつて、人々の日ごろの信心が動揺したと。これは伝えられるところによりますと、善鸞が、私一人が親鸞から聞いたことがあるとか、今まで聞いてきた教えは間違いだとか、こういうことを言つて関東の門弟たちの心を惹こうとしたようであります。しかし、それによつて関東の人達がかえって動揺してしまつたわけです。動揺したということは、結局は親鸞聖人の息子である善鸞さまが来てくださった。だから、善鸞さまだけが聞いている教えがあるかもしれないと考えたわけですね。いわば、教えよりも人をあてにしたわけです。そこに揺らぐということが起こつたのでしょう。

親鸞に戻って考えれば、親鸞は法然上人が言ったから信じたというわけではなかったですね。偉い人だからついはいこうという決着ではなかった。たとえ行く先が悪道であってもかまわない、地獄におちてもかまわないという信念でした。なぜなら、愚かなものの見方、考え方に流されるならば、必ず迷いを重ね続けていく、そういうわが身が見えたからです。そういう自分が見えたから、念仏を拠り所として生きていかねばならないという決着がついたわけです。誰が言ったから信じる、この人が言ったならば信じないという、人だのみの信心ではなかったのです。人だのみというのは、答えを求めているからだと思います。これが真宗の正しい答えですよということを出されると、そうかなというふうに流れてしまう。でも、答えに流れるというところには、問いが抜け落ちますね。自分にとってはどうかという問いを横に置いて、善鸞が言っていることが正解かもしれないと流されてしまう。これは現代でも起る問題だと思います。その答えが正しいのかどうやって確かめるのでしょうか。念仏によって生きるといことは、一つの正解があるのでしょうか。そういう問題をここから見ることができると思います。

先ほどの手紙に戻れば、善鸞にだまされたことはあさましいことである、悲しいことであるという言葉が何回も出てきます。善鸞ごとき者の言ったことに踊らされてしまったことは、なんともあさましい、なんとも悲しいと。しかし、その最後に「よきことにてせうろう」と言われています。何がよかったかと言えば、「ひとびとの信心のまことならぬことのあらわれてせうろう。よきことにてせうろう」と。つまり、何を今まで信じていたのか、それがはつきりしていなかったことが明確になったわけですね。そのことはよかったというわけです。よかったということは、それを縁にしていよいよ何を拠り所にして生きるかを明確にしていってほしいということです。だから、慈信房におどらされたこと自体はあさましい、悲しいこととおっしゃるのですが、でもそれによってあなた方の信心がはつきりしていなかったことが明確になったのはよかったと言うのです。いわば、「たじろき」を縁とせよということです。

この出来事は親鸞の晩年のことでありますけれども、三部経千部読誦の中止ということと重なる課題があると思います。

ます。四十二歳の時に、ただ念仏一つということに決着したはずの問題が、五十九歳の時にもまた出てくる。そういう自分が見えたということは、ある意味で言えば、まだこんなことが残っていたか、教えを聞きながら何ということだという思いがあったかもしれません。しかし、そういう自分だからこそ、教えを聞き続けていかなければならないということが明確になっていったと思います。推測が過ぎるかもしれませんが、そういうことを恵信尼さまに語っていたに違いないと思うのです。もし、この三部経千部読誦ということが、親鸞にとつて恥ずかしい体験なら、だまってい飲み込んだはずですよ。でもそうではなく、人間の愚かさはつきりと知らされた。だからこそ、そういう私のためにあるのが念仏だということを改めて確認し、恵信尼さまにも語ったのではないでしょうか。「賢善精進の相」を現するのではなくて、愚かな私という事実にかえって念仏もうしていく。このことをはつきりさせたのが、親鸞にとつての三部経千部読誦とその中止という出来事だったと受け止めています。

有名な言葉ですが、「親鸞は弟子一人ももたずさうろう」という『歎異抄』の一句があります。ともに同朋として生きていかれた、そういう親鸞の姿をよく伝えていきます。愚者、凡夫、煩惱具足、自力の執心を離れられない、こういう自身であるということと見続けていったのが親鸞という人だったと思います。これは「愚禿悲歎述懷」などを見ても明らかであります。八十半ばを超えてもなお、わが身の愚かさを見続けていった親鸞です。でもそれは決して情けないことではない。そういう私のために念仏という道があるということを、いよいよ確かめていった。これが親鸞がどんな人でも同朋として交わりを結ぶことができた、その理由ではないかと思えます。

少しでも自分の賢さ、能力の優れているといったところに基準を置けば、そうでない人を見下すに決まっています。ともどもに愚かであるということに立ち続けた親鸞だからこそ、「弟子一人ももたず」と言い、ともに同朋であるというところに立っていったのです。こういう立つべき場所が明確になったのが親鸞にとつての関東という時代ではなかったかと思えます。現実の問題の中で、揺らぐことも起こってくるわけですが、そのことを通して愚かなわが身と

いうことを知らされ、そこに安住することができた。そういう親鸞を育んだのが関東という時代、「いなかのひとびと」との出会いではなかったかというのを申し上げたかったわけです。

「関東の親鸞」という題だったはずですが、「親鸞にとつての関東」のような話になってしまいました。私の話はここまでとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（本稿は、二〇〇九年一〇月二七日の真宗学会大会での講演記録に加筆・訂正いただいたものである。編集部）